

(城西人文研究第19巻第2号)

夏目漱石の比喩論

楊 麗 雅

はじめに

本論では夏目漱石の文学論著などにおける比喩論及び文学作品における比喩表現を考察し、その特色及び漱石の比喩観とその創作との関連について分析を行なう。本論を通して漱石の文章意識及び文学観の一端を明かにしていきたい。

以下の三つに分け、論を進める。1. 漱石の比喩分類法、2. 文学における比喩表現の役割に対する漱石の考え、3. 漱石の比喩観とその創作。

1. 比喩の分類法

漱石は比喩的表現を、「感情の類似」による比喩、「智力に訴える比較」による比喩、「専擅的比較」による比喩と、三種類に分類している。

(1) 「感情の類似」による比喩

「甲を乙で表現する時に感じが好くなるもの、言ひ換ふれば甲と云ふものが乙の辭で表はされたる時に、吾人が感情の上から甲を理解することの出来るもの⁽¹⁾」の類を指す。この類の比喩表現の特色としては、「両者の間に感情の類似があるからで、片方を片方で感情の上から理解する便りになる。極端の例を云ふと、色を以て聲を形容する様なもので、感情以外に両者の間に一點の似た所も無い」(『文学評論』p. 261)と述べている。この例として、美人の悄然と

している様子を花の凋んだのに比している。漱石はそれに関する具体例を示していないが、美人の悄然としている様子と花の凋んだ様の比較としては、次の三つの形で表現されるであろう。

- ① 彼女は凋んだ花のように悄然としている。
- ② 彼女は凋んだ花である。
- ③ 凋んだ花

修辞学上の分類では、①は直喩であり、②と③は隠喩である⁽²⁾。また②は隠喩で、③は諷喩であるという分類法もある⁽³⁾。これは比喩表現の言語構造上における明かな相違点に着目した分類法である。これに対し、漱石の分類法は比喩表現の表現効果に重きをおいたものである。

(2) 「智力に訴える比較」による比喩

「例へば人間は蒸気機関の如しと云ふ様なものである。別段それに伴ふ感じの似た所は無い。然らば何故に此兩者を比較するかと聞いたとき、両つながら火を焚かなければ活動しないと云はれて成程と頷く。成程と頷くのは感じが似て居ると云ふよりも、智的に兩者の似た所を發見したからである」(『文学評論』p. 261)。

ここでも以下の三つの比喩の形で表現できる。

- ④ 人間は蒸気機関の如し……直喩
- ⑤ 人間は蒸気機関である……隠喩
- ⑥ 蒸気機関……諷喩

(3) 「專擅的比較」による比喩

「智的にも情的にも似た所は無いけれども、たゞこれを此代りにするから左様思へと云ふに過ぎないのである。例へば人間を以て「時」を表はしたり、日本

といふ国を女で示す様なもので、恰も代数で a が十の代りに成り、 b が二十の代りになると同じ事である。是は単なる約束であつて、両者の間に別段感じの似た所も無ければ、又理由も認められない、唯勝手に極めたものである」(『文学評論』 p. 263)。

「專擅的な比較」による比喩表現は、修辞学でいう象徴法にあたる。漱石は象徴法については「科学者が数字を用ゐる性質において異なるところなし」と考え、「凡そ象徴法に於ける記號は多くの場合に於て思索の關門を通じて初めて捉へ得るを例とす。換言すれば記號は其代表するところのものを直下に喚起して、水を掬んで冷暖自知するが如くに興を誘ひ來る事すくなきが故、恰も洒落を聴きて感じ得ず、其説明を待つて初めて其意を悟ると異なるところなきに似たる點あり」(『文学論』 pp. 240-1) という。

上の論述から漱石が象徴法を否定的にとらえているのは明かである。漱石があまり象徴法を好まないのは、象徴法が鑑賞される過程において、ある種の情緒や感興を容易に受容者に起こさせないからである。

漱石の比喩分類の特色は、比喩表現の言語構造よりその表現作用を分類の基準としていることである。例えば、(1)の感情の類似による比喩として挙げた三つの比喩例が言語構造上異なっているが、同じく「美人の悄然としている容子」を形容している点において共通している。「美人の悄然としている容子」と「凋んだ花」という二つのイメージを連結させたのは、われわれが二つのイメージから得た共通の感興である。この種の比喩はイメージを喚起し、情緒を催す作用を持つものが多い。これに対し、(2)の「智力に訴える比較」による比喩は、イメージや情緒より説明や論証する作用をもつものである。

2. 文学における比喩表現の役割

漱石は文学における比喩表現の役割として次の三点を挙げている。(1)情緒を転置する作用、(2)表現を簡潔にかつ印象的なものにする作用、(3)幻惑を生み出す作用。

(1) 情緒を転置する作用

「抽象的眞理を示さんとするとき、それを他の具體的なる場合と聯想せしめて、この具體の場合に於ける f を其儘、抽象の場合に轉置せしむることあり。この聯想は重に隱譬、直譬の形をとりて現はるゝものとす」(『文学論』 p. 162)。f は文学における情緒的要素をさす。漱石は「文學の内容は情緒を主とするものにして、これあるが故に文學は成立し得るものなり」と述べているように、情緒的要素をたいへん重要視し、情緒を転置する作用を、比喩のもつ重要な働きの一つとして考える。

漱石は次のポープの例を挙げて比喩の転置作用を説明している。

“ 'Tis with our judgments as our watches, none
Go just alike, yet each believes his own.”
—Pope, *Essay on Criticism*, 11. 9-10⁽⁴⁾.

「此場合に若し此「時計」の譬なかりせば此抽象的理論は単に漠然たる取り止めの付かぬ印象を與ふるに過ぎざりしなるべく、散漫にして毫も味なく、唯白湯を呑む感ありしならん」(『文学論』 p. 162) と評している。

これは具体的な事物をもって抽象的な事物を喩える類の比喩表現である。前述のように漱石は情緒を文学の生命の源と見なしている。したがって、情緒を起こしやすい表現はそうでない表現より文学的に優れているものであると考える。漱石は具体的事象は抽象的事物より情緒をかもしやすいために、抽象的事物のみでは無味乾燥になってしまうのを、比喩に用いられる具象物によって避けられることを示している。

(2) 表現を簡潔にかつ印象的なものにする作用

比喩表現が簡潔に、かつ印象的に対象を描写する作用をもつ。この種の作用について漱石は女性の容貌の描写を例に、つぎのように論じている。「小説中

の女性の容貌の如き鼻は何、眼は何と一々精細に叙述し來る時、其結果たゞ朦朧たる影が脳裡に宿るに過ぎざること多し、これ即ち各部の成功を計りて全局の印象を後にしたる弊なりとす」(『文学論』 p. 226)。一方、簡潔で抽象的な一語をもって女性の容貌を表わそうとすると、「其一語の漠然として何等の具象をも捕捉」(『文学論』 p. 229) しがたい。すなわち、「叙述長ければ纏まらず、強ひて纏めんとすれば所要の印象を生ずること難し、故に詩人は美人を解釈するに恰好なる感覺的材料を用ゐて、或いは花に或は月に、凡て美しき外物に比す」という。

漱石はその作中人物の女性の容貌を描写するときによく比喩表現を用いている。ここでその一例をあげよう。

櫻の花を碎いて織り込める頬の色に、春の夜の星を宿せる眼を涼しく見張りて……。 (『一夜』 p. 135)

漱石はここで長い描写を避け、『一夜』の「女」の頬の色と目の特徴を、「櫻の花」と「春の夜の星」という二つの感覺的なイメージによって簡潔かつ印象的に描き出すのに成功している。

(3) 幻惑を生み出す作用

作家はその描き方によっては読者にある種の幻惑を起こさせることができる。例えば、「物體そのものは實際經驗に於て不愉快なるも、聯想により結びつけられたる觀念と共に表出する時、その觀念若し美なれば、吾人がこれに對して生ずる f も亦美となるものなり」(『文学論』 p. 146)。この f (情緒) に伴う幻惑を説明するのに、漱石は次の例をあげている。

“ He read, how Arius to his friend complain'd,
A fatal tree was growing in his land,
On which three wives successively had twin'd

A sliding noose, and waver'd in the wind.”

—Pope, *The Wife of Bath*, ll. 393-6⁽⁵⁾.

「此意味はもとより三人の妻女つづきて樹上に縊死せりと云ふにありて、實に不愉快極まる事件なり。然れども、此詩につつまれたる此事實は其不快の念を償ふに足るのみならず、何となく美しき感じさへ生ずるを注意すべし。是直接に縊ると云ふ字を點出せずして、sliding noose を twine するといふ比較の間接にして且滑かな感じを聯想せしむる言語を用ゐたると、waver'd in the wind なる藤の花、かづら杯の風裏に揺曳する様を聯想せしむる字句を使ひたるが為め、意味は首を縊りたるなりと合點せらるゝにも關せず、首縊りに關する醜惡なる光景は眼前に浮かび來らぬなり」(『文学論』 p. 147) と漱石は評している。

漱石の解説の中でもっとも興味深いのは‘waver'd in the wind’という表現から藤の花やかずらなどが風の中で揺曳する様を連想するところである。人によっては、‘waver'd in the wind’という表現から直接に女性が首を縊った情景を連想することであろう。その句の中に藤の花などにまったく触れられていないにもかかわらず、漱石はそこから風の中で揺れ動く藤の花を連想している。これは漱石の俳句作者としての素質が働いているのでであろう。このような連想は同時に漱石の美意識や文学観にもとづくものである。

漱石は、「文学者が不愉快な材料」や「醜劣な材料」を扱うときに、「若し實際と讀者と其感情の強弱の度均しと主張する人あらば、そは文學を楽しみ得ざる人なり。實際と同等の感動を以て、かゝる文學に對するならば文學とは決して面白きものにあらず、却て恐ろしきものなるべし、厭なもの、近づけ難きものなるべし」(『文学論』 p. 167) と考える。これは漱石の文学観をもっとも端的に示している論述であり、当時の日本の文壇における自然主義の文学と根本的に異なるところである。

3. 漱石の比喩観とその創作

漱石自身の文学創作における比喩表現は以下のような特色をもつ。(1)喩体に多く自然景物を用いる。(2)喩体自体は文学的感興を催す。(3)比喩表現の幻惑作用を駆使する。

(1) 喩体によく用いる自然景物

漱石はその文学作品において常に人間と自然との調和の美を呈示している。人事を描く比喩表現に多く自然景物を用いるのはその現れの一つである。この類の比喩表現には漱石がとりわけ「調和法」という名称を与えた。次は漱石の挙げた調和法の一例である。

此程は三人一所に有りつるだに。さも怖ろしく。すさまじき。荒磯島にたゞひとり。離れて海士のすて草の波のもくづのよるべもなくてあられんものか浅ましや……。 (『文学論』 p. 310)

この比喩表現に対しては二つの解釈が可能である。一つは人間の運命を「海士のすて草」、つまり海士が捨てた海藻の屑にたとえている、いわゆる抽象的な事物の具体化、形象化の比喩としてである。もう一つの読み方は漱石のいう調和法である。これに基づくと、この表現は、「極めて切實なる自然の風景を點綴して數奇の運命を詩化する點に於て、一種特有の調和」を保っているのである。

調和法としては「海士のすて草」は、単に人間の運命の解釈においてのみ価値があるのでなく、それ自体は一つの自然風景として読み手に詩的情緒をもたせる。したがって、本体と喩体は単に類似関係によってのみ結びつけられたのでない。「海士のすて草」を配置したことによって、人間の運命を暗示し、形象化するうえで、「海士のすて草」自体のもつ意味によって、人間の運命に一

種の詩的な色彩を附加させる。これは日本の短歌や俳句の中によく用いられ、中国の古典詩歌の中でも重んじられる手法である。漱石は調和法と東洋詩歌との関連について次のように述べている。

かの漢學者の詩文評に情景兼至などあるも、畢竟人事的材料對感覺的材料の調和上に成功せるを賞するに過ぎず。由來我邦人は先天的に自然を愛する傾あるがごとく、古より詩歌美文にして未だ嘗て此調和法を度外視したることあるなし。人事の背景には必ず自然あり、自然の前景には必ず人事あるを常とす。泰西の人烟霞の癖に耽る事意外少なく従つて彼等の作物中此種の調和を必然の要求と認めざるが如き觀あるは、東洋人にとって注目すべき現象と云はざるべからず。

(下線は筆者による、『文学論』 pp. 306-7)

「情」と「景」は中国の古典詩歌創作にとって欠くことのできないもっとも基本的な要素である。俳句の季語も「情景兼至」の理念と共通する。漱石は東洋詩歌の理念に基づく調和法を導入することによって、比喩の解釈に新しい境地を開いたのである。

(2) 単独に味わう際も文学的感興を催す喩体

漱石はスウィフト (Jonathan Swift) の『桶物語』の諷喩を例に、「単に諷喩であるが為めに價值を認められるものと、比喩としては殆ど價值を認められないが、文學的に見て單獨に価値を有するもの」(『文学評論』 p. 274) という二種類の諷喩について分析を行なっている。その結論としては、後者、つまり諷喩としては價值がなくても、単独にみるとき、文学的感興を催すことができるほうが、前者の、諷喩としては成功している代わりに、地の文章が無味乾燥である諷喩より文学的価値が遙かに優っている。

漱石はまた、アヂソン (Joseph Addison) が『スペクテーター』百九十八の中で御転婆をサラマンダー (Salamander) という怪物にたとえた比喩を評

して、「頗る面白い。思ひも寄らぬサラマンダーを引貼り出した所が奇抜であるのみならず、比喩が中々適切に行っている。誰でも微笑する様な御手際である。日本で云ふと蛙の面に水といふのと同程度で、それ程陳腐に聞こえないから刺激が多い」(『文学評論』 p. 218) と評している。漱石の主張は、喩体が本体を説明するのに価値があるのみでなく、それ自体も面白いもの、あるいは感興を催すものでなければならない。

一方、漱石は文学上の価値はあるが、喩体があまり複雑すぎるため、その本体が容易に浮かんでこない比喩表現の欠点をも指摘している。漱石はこのような比喩を称して、比喩のための比喩にして、本文を説明するための比喩ではないという。

I. A. リチャーズ (I. A. Richards) はこの種の比喩については「本体はほとんど喩体を導入する単なる口実にすぎなくて、もはや《主題》ではなくなる⁽⁶⁾」という指摘をなしている。

この種の比喩の特色は喩体が長い。漱石の初期作品の中で、このような喩体の長い比喩表現が見られる。例えば、『草枕』で、画工が自分の部屋の襖から、向こうの二階の欄干にもたれている那美さんの姿を見たとき、いままで「二羽寄りつ離れつ舞ひ上がる」蝶々を見ていた那美さんが、卒然と蝶から眼を画工の方に転じた。「視線は毒矢の如く空を貫いて会釈もなく」画工の眉間に落ちた。このような緊迫した一瞬のすぐあとに、画工は自分と那美さんとの関係について様々に詩想をめぐらしはじめる。

二人の間には、ある因果の細い糸で、此詩にあらはれた境遇の一部分が、事実となつて、括りつけられて居る。因果も此位糸が細いと苦にはならぬ。其上、只の糸ではない。空を横切る虹の糸、野邊の棚引く霞の糸、露にかぶやく蜘蛛の糸。切らうとすれば、すぐ切れて、見て居るうちは勝れてうつくしい。

萬一此糸が見る間に太くなつて井戸繩の様にかたくなつたら？ そんな危険はない。余は畫工である。先は只の女とは違ふ。(『草枕』 p. 431)

漱石は画工と那美さんとの関係を、世俗的な男女関係でないことを説明するため、様々な美しいイメージを導入し詩化している。ある意味では比喩の本体である二人の関係よりも、これらのイメージのほうが余韻をもつ。このような比喩表現は漱石自身の言った「主客を顛倒せるが如き趣」がある類に入るが、漱石はここで逆にこのような比喩の特色を巧みに利用したのである。幻想的イメージの積み重ねは、普通の世俗的に考える男女関係から超越する働きをもつ。

次に『虞美人草』から一例をとりあげよう。小野さんの過去の暗い境遇を説明する比喩表現である。

水底の藻は、暗い所に漂ふて、白帆行く岩邊に日のあたる事を知らぬ。右に揺かうが、左に靡かうが颯るは波である。唯其時々逆らはなければ済む。馴れては波も氣にならぬ。波は何物には上らぬ。上つた所で改良は出来ぬ。只運命が暗い所に生へて居ると云ふ。そこで生へてゐる。只運命が朝な夕なに動けと云ふ。だから動いてゐる。——小野さんは水底の藻であつた。(『虞美人草』 p. 64)

おとぎ話の世界を呈示したような諷喩である。漱石は諷喩の興味は二つあるとあって、「一は地の自身が文學的で面白いこと、一は地の文の裏面に潜む本意と表面にあらはれた意味との間に並行を見出すことの面白味である。然るに後者だけの興味では一向吾人に満足を與へない。夫から受ける興味は頗る薄弱なものである」(『文学評論』 p. 274) と述べている。上にあげた『虞美人草』の一例を見ると、比喩に用いられる「藻」は詩味に富む材料であり、詩人である小野さんには適切な聯想であるといえよう。この上、「藻」の擬人化によって、一つの幻想的な世界を作り出している。

ここで注目すべきなのは、漱石の長い比喩が直喩の形を用いないことである。喩体に用いる材料が詩的感興を催すものでも、直喩の形で表現する場合は、「主客を顛倒せる」ような比喩になってしまう。漱石は、次の例をあげ、

主客転倒な比喩の弊を指摘している。

“ And as a spray of honeysuckle flowers
Brushes across a tired traveller’s face
Who shuffles through the deep dew-moistened dust,
On a May evening, in the darkened lanes,
And starts him, that he thinks a ghost went by—
So Hoder Brushed by Hermod’s side.”

—Matthew Arnold, *Balder Dead*, 1. 11. 230-5⁽⁷⁾.

上の例と小野さんを水底の藻にたとえる比喩とを比較してみると、両者はともに喩体が長々とした描写をなしているのに一致している。しかし、前者は“as”という直喩の形をとっていることと、また本体と喩体がはっきりと文章の上で顕示されているという二つの特色をもっているために、その比喩はなおさら「主客転倒」の感が強い。

一方、漱石の比喩の場合は、小野さんを完全に「水底の藻」と化しているゆえに、連想の範囲が広くなる。漱石のこのような比喩表現は東洋の詩歌によく用いられる調和法による連想であり、人間と自然景物を渾然一体と化す作用を呈示している。

(3) 幻惑作用を起こす比喩表現

漱石は「草枕」で女主人公の那美さんを水死した乙女の幽霊に化するため、比喩の幻惑作用を用いている。以下はその例である。

太玄の闈おのづから開けて、此華やかなる姿を、幽冥の府に吸ひ込まんとする時、余はかう感じた。金屏を背に、銀燭を前に、春の宵の一刻を千金と、さぶめき暮らしてこそ然るべき此装の、厭ふ景色もなく、争ふ様子も見えず、色相世界から薄れて行くのは、ある點に於て超自然の情景であ

る。……黒い所が本来の住居で、しばらくの幻影を、元の儘なる冥漠の裏に収めればこそ、かやうに閒靨の態度で、有と無の間に逍遙してゐるのだらう。女のつけた振袖に、紛たる模様の盡きて、是非もなき磨墨に流れ込むあたりに、おのが身の素性をほのめかしている。

(下線は筆者による、『草枕』p. 462)

「太玄の闇」や「幽冥の府」という比喩の喩体は、現実の夕暮れの暗さを喩えていると同時に、非現実的な霊の世界の空間をも呈示している。「黒い所」、「冥漠の裏」、「磨墨」などがいずれも暗い死の世界を象徴している。比喩の作り出されたこれらのイメージによって、夕暮れの中に見えつ隠れつする那美さんは、束の間その幻影を現実に見し、また死の世界へと戻っていく幽霊と化している。

同じく『草枕』の中で那美さんの裸体を、人間の肉体を超越した仙女の姿に昇華させるために、比喩の幻惑作用を発揮している。

春の夜の灯を半透明に崩し擴げて、部屋一面の虹霓の世界が濃かに揺れるなかに朦朧と、黒きかとも思はるゝ程の髪を暈して、真白な姿が雲の底から次第に浮き上がつて来る。(『草枕』p. 471)

「虹霓の世界」は、温泉の湯氣を「半透明に」照らす灯影を形容し、「雲」は立ち上がる温泉の湯氣を喩えていると同時に、現実の温泉の風呂場を仙境と化している。湯壺に現れた那美さんの裸体の姿は、「雲のなかに呼び起こしたる」神代の姿や「桂の都を逃れた月界の嫦娥が、彩虹の追手に取り圍まれて、しばらく躊躇する姿」のように画工の眼に映ったのである。この比喩は読者に現実の時空を忘れさせ、幻想の時空へと導かれる。このような比喩表現は、女性の裸体を仙境のウェールを通してはじめてその美を見い出すという漱石の美意識と露骨な描写を好まない漱石の文章意識に根ざしたものである。

結 び

漱石の比喩論は以下の二つの特色をもつ。その一は、喩体のもつ役割、とくに、必ずしも本体と直接に関連しない喩体自身のもつ意味と情緒を重視することである。その二は、比喩表現が人間の情緒を動かす面に焦点をあてて、情緒を生み出す重要な文学手段として比喩表現をとらえていることである。

漱石の文学理論が小説家としての漱石とはそれほどからみ合っていないという見方と、それが彼の創作の支えとなっている、という二つの見方がある。本論を通して、漱石の比喩観がその文学観に深く根ざしたものであると同時に、漱石がその創作の中で実践していることが明かとなった。

《注》

- (1) 本論における漱石作品の引用はすべて岩波書店昭和四十一年発行の漱石全集による。以下は本論に引用される漱石の作品のリストである。

『文学評論』……第十卷

『文学論』……第九卷

『一夜』……第二卷

『草枕』……第二卷

『虞美人草』……第三卷

- (2) 例えば、ジュラルト・ジュレットは例3の「凋んだ花」のように喩体のみがあり、本体が明示されていない比喩が真の隠喩であるという説をとっている。

(Genette Gerard, *Figures of Literary Discourse*, Columbia Univ. Press, 1982, p. 112).

- (3) 中村明氏は直喩、隠喩、諷喩という三者の相違点を次の例によって示している。ドラマチックな死で閉じたある人の絢爛たる一生を、「花のような生涯」と評すれば直喩になり、単に「花の生涯」と圧縮していえば隠喩になり、「花」だけを表現してそのような人生を思わせるのが諷喩だ。(『比喩表現辞典』40頁、角川書店 昭和52年)

- (4) 「われわれの判断力は時計に似ている。どれ一つとして／同じには動かない。しかも各々も自分の時計を信じている」(ポーブ『批評論』角野喜六訳、『文学論』p. 162)

- (5) 同上「彼の読んだ話では、アリアスが友嘆いて語った、／庭にひともと不吉な木があって／その木の上に妻が三人まで相次いで／輪縄をからませ、風にゆらゆら揺られた、と」(ポープ『バースの女房』角野喜六訳、『文学論』p. 146)。
- (6) I. A. Richards, *The Philosophy of Rhetoric*, p. 100. Oxford Univ. Press, 1936 (本論での訳は筆者による)。
- (7) 「五月の夕ぐれ、暗くなった小径の／深く露じめりした土をふんでゆく／疲れた旅人の顔に／忍冬の花の小枝が触れて、／幽霊でも通ったかと彼をおどろかすように、／ホルダーはハーモンドの側をかすめて行った。」(マシュー・アーノルド『ホルダーの死』角野喜六訳、『文学論』p. 280)。